

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	想起の構造における、テンスを表さない「タ」形
Author(s)	アドリアーノ マランタ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1991 : 105 - 121
Issue Date	1992-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039310
Right	
Relation	



『想起の構造における、テンスを表さない「タ」形』

アドリアーノ マランタ

目次

1. はじめに.....	1
1.1. 何が問題か.....	1
1.2. 参考文献におけるまとまった説明.....	1
2. 想起の構造に起こる「タ」形を文法の面から調べてみる....	2
2.1. 会話を背景にする寺村の説明.....	2
2.2. 会話の背景でなくても、また述語は動詞に限らない....	4
2.3. 述語は動的動詞や「い」形容詞の場合にはどうなる か。「のだ」の必要について.....	5
3. 内容の述語として有り得る述語の「のだ」必要調査.....	7
3.1. 調査の範囲.....	7
3.2. 想起の内容となる述語の「のだ」が付く必要一覧.....	8
3.3. 結果の解釈.....	11
3.4. まとめ.....	14
3.5. 「のだ」が付く場合に文の述語は果たしてどこにあ るか.....	14
4. 調査の結果と参考文献.....	14
5. 想起の「のだ」は「説明の『のだ』」か「名詞化の『の だ』」か.....	15
6. 発話者の心理.....	15

想起の構造

1. はじめに

1.1. 何が問題か

この節では、下記のような、過去を意味しない「タ」形を調べてみよう。

< 1> 「お名前は何でしたっけ」

< 2> (独り言)「ああ、忘れちゃった。『ころ』を書いた作家はだれだったっけ」

< 3> (夜 8時に会がある予定) 今晚ノ会ハ何時ニ始マルンダッ?

などのような文における「タ」形である。(< 3>は寺村1984: 340から、下線また文脈はマランタ)。

これらの下線した「タ」形はいずれも時間的な「過去」を表さなく、普通「タ」形の表すテンスやアスペクトでないと思われる。例えば、< 1>の場合はこういう風に相手に名前を聞くと、相手の名前は聞く時点でも以前とは同じであって、何も以前と聞く時点の間に名前の変化はなかったという文脈である。もちろん、結婚している奥様に対して、

< 1'> 「結婚する前は、お名前は何でしたか」

とはとても言えるけれども、ここでの「タ」形ははっきり「過去」を表して、普通のテンスの現象であろう。< 2>でも、夏目漱石は1916年(つまり過去)に亡くなっても、

< 2b> 「『ころ』という作品を書いたのは夏目漱石です」

と時間に関係ないことに似ているように、< 2>の「タ」形は1916年前の時を指しているわけではなくて、テンス的な「過去」とはいえないであろう。また< 3>の場合でも、会は同じ日の夜(=未来)に行く予定があっても、話し手はその未来の時点を聞くのに「タ」形を使う。

1.2. 参考文献におけるまとまった説明

参考文献によって、この問題の説明は、北原(1989: 223)の場合ではただ「想起の意をあらわす」、加藤・福地(1989: 16)でも簡単に「いったん忘れてしまっていたことを思い出した場合」で、町田(1989: 89)で「ある事柄を発話者が忘れてしまった、つまり知らないということをぼかすために使用される「タ」形」などとして取り上げられている。益岡・田窪(1989: 98)は

< 4> あなたは確か鈴木さんでしたね。

という「か」助動詞の欠ける疑問文を例にして、「確認の気持ちを表すとき」に用いられる「タ」形であると述べる。

これらは各著者の略してまとめた説明であり、皆、ある過去の時点に認識した内容を完全に忘れてしまったときにその内容をまた聞くか、一時忘れてしまったが、思いだしたのは正しいかどうかと内容を確かめるとき(=<4>の場合)に使う「夕」形であるといった点ではだいたい共通していると言えるであろう。しかし、いずれも、この「夕」形をどういう時に何を表すために使うかという、現象を描写的にしか解釈しない説明であり、なぜこんな「夕」形になるかという質問にはあまり触れない。

この、もっと根本的な、質問にある程度答えようとしてみると、次の二つのレベルで答えたほうが良いと思われるであろう。一つの問題は、この「夕」形は文法的にどういう風に文の構造に入ってくるかと具体的に説明してみることであり、そしてもう一つの問題は、話し手がこんな「夕」形を使う時の心理的状态はどういう特徴をもっているかという質問であろう。前者に触れてみるのに、これから寺村(1984: 339)に取り上げられた説明に沿って説明してみたいと思うが、後者については2節と3節の問題を少し調べておいてから、もっと一般的に考えてみたいと思う。

2. 想起の構造に起こる「夕」形を文法の面から調べてみる

2.1. 会話を背景にする寺村の説明

寺村(1984: 338)は

<5> 失礼デスガ、オ名前ハ何デシタカネ?

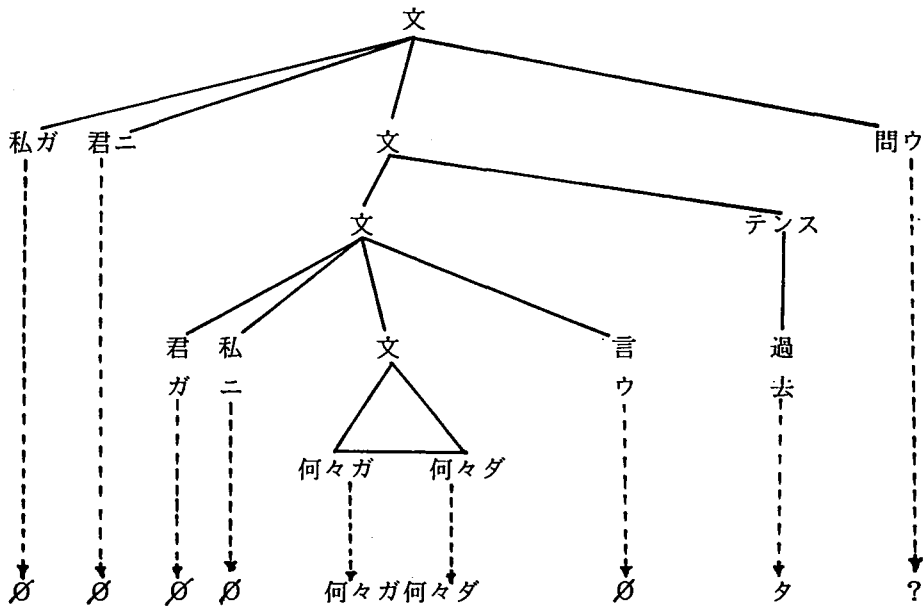
という文を例にして、あたかも

<5b> 私が君ニ [君ガ私ニ [名前ガ何々ダ] <と過去に> 言ウ] と問ウ

のように解釈している(上の分析はマランタ)。つまり、寺村を引用して、「…図示する

(3)

と、次のようなものであろう。



このように、伝達や認識の動詞（の語幹）が消去されて、その持っていたテンス表示がその伝達・認識の内容を表す文の述語と結合して表面に現れる」と述べる。つまり、上の図では、「伝達や認識の動詞」というのは「言ウ」という述語に相当しており、また「伝達・認識の内容を表す文の述語」は図に「テンス」として表れてある。この「テンス」（＝「タ」形）は「言ウ」という内容の文の述語と結語するわけであろう。

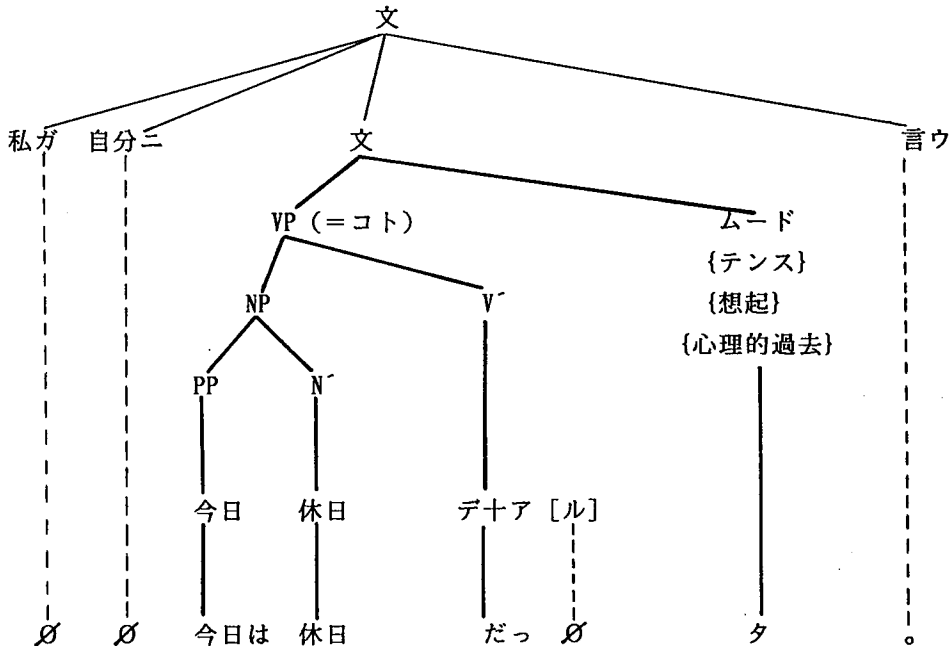
「テンス」は先の解釈で述語の一つとして考えられた（詳しくいうと内容の文の述語である）が、ここでは「述語」というよりも、その内容の文のムードであると一応考えたほうがいいかもしれないので、ここから「テンス」をムードに含まれた一つの下位概念として見ることにしよう。

さて、前の頁では寺村がく5>のような、会話における文をどのようにして文法的に解釈しているかを見てきたが、始めのく2>の独り言の例文に見えるように、この「タ」形で表した想起は会話（つまりある話し手とある聞き手の一緒に開ける枠）以外にも起こることであると分かるであろう。またく4>の例文を見ると、この想起の「タ」形は疑問文に限っていないともみられる。やはり、

く6>（独り言） 「ああ、そうだ。今日は休日だった」

のような会話に関係ない、また疑問でもない文も可能である。先に示してみたように、寺

村は会話における<5>の文をその会話（はっきりというとは、過去に起きた会話（＝君が私二名前ヲ言った）と発話時点に起きているところの会話（＝私が君二問う））を背景に分析したけれども、ここでは単なる念のために<6>という確言の独り言でも分析してみよう。



こういう風に見てみると、過去には何も会話（つまり、[君が私ニ [何々が何々ダ] 言ウ]）が必要でないとみえてくる。ただ必要になっているのは、想起のムードを表す「タ」形が述語として、あるVP(= verbal phrase) に結び付けられることであるとみえる。「VP」の代わりに「コト」や簡単に「述語の持つ内容」と、どんな言い方でも良いであろうと考えられる。

2.2. 会話の背景でなくても、また述語は動詞に限らない

なお、こういう風に、想起のムードの「タ」形はただある述語を持っている内容と結び付くにすぎないと一般的に言ってきた上、日本語にはどういう述語が有り得るかと思出すと、動詞的述語の他に例えば形容詞的述語もあると忘れてはならないと思われる。やはり、文法的にはコトの述語としてある「い」形容詞（言い換えれば、あるAP(=adjective

phrase))でも想像はできると思うけれども、実際に言語に起きるのは遥かに少ないであろう。

例えば、あるサラリーマンはたいへん忙しい日の夜に家に帰ってきて、普通はいつももう家に帰ってきた奥さんがどこでも見つからない時に

〈7〉 「ああ、そうだった。今日は遅いんだ」

と奥さんが同じ日の朝、今日は遅く帰ると言ったコトを思い出すことができるであろうが、先にも言ったとうり、このような形容詞的述語は思い出す内容の述語として有り得るのに、動词的述語の使う頻繁さと比べれて割合に少ないであろう。この差はけっきょく動詞と形容詞の性質違いから因ると簡単に分かれるであろう。動詞は形容詞と違っていくつかの補語でも持つことができ、アスペクトを表すのも可能であって、どれほど複雑なコトの中心にもなってくるが、形容詞的述語はもう言うまでもなく補語を持つことができなくて、ただ性質をしか描写できないため、この思い出す内容の述語としてごく限られた数だけで起こるであろう。

(ところで、上の形容詞と動詞のギャップはとりわけ名詞の修飾の場合で簡単にみえる。要するに、形容詞が修飾するなら、修飾節は動詞の場合と異なって割に短くや「簡単」になる傾向があるという現象の原因は同時にこの形容詞述語の少なさの原因ともなるであろう。)

2.3. 述語は動词的動詞や「い」形容詞の場合にはどうなるか。「のだ」の必要について

さて、これからは前に述べた「述語を持つ内容」の述語の性質についてあともう少し考えてみよう。ここまで説明してきた述語は皆状態動詞あるいは形容詞であったが、始めの

〈3〉 今晚ノ会ハ何時ニ始マルダツタ?

という例を繰り返して見ると、「のだ」の前は「始マル」という動词的動詞があると気がつく。やはり、この文の思い出す内容の述語は果たして「始マル」か「(の)だ」であろうかという質問が自然に浮かぶが、この問題を、思い出す内容の述語が動词的動詞の場合ではどうなるのであろうかという問題につながって、これから一緒に簡単に考えよう。

寺村(1984: 340)は〈3〉の「のだ」が付いた文に

〈3'〉 ×今晚ノ会ハ何時ニ始マツツタ?

という文を対立して、こういう風に動词的動詞で文を終えると非文法的になると示す。また

〈8〉 明日ハ彼ト会ウノダツタ

〈8'〉 ×明日ハ彼ト会ツツタ (寺村1984: 340、下線はマランタ)

〈9〉 「君、アメリカのどこへ留学しに行くんだ」

〈9'〉 ×「君、アメリカのどこへ留学しに行った」

の二つのペアも同様であるので、動詞の述語の場合には「のだ」を付ける必要があることを一応一般的に規則として立てよう。しかし、まず次の二つのペアも見てみよう。

<10> 「失礼ですが、お名前は何とおっしゃるのでしたか」

<10'> 「失礼ですが、お名前は何とおっしゃいましたか」

<11> 「お名前は何というのでしたっけ」

<11'> 「お名前は何といったっけ」

<10'> と <11'> は明らかに言えるので、ひと目見て先に立てようとした規則は矛盾になりそうのではないかと考えるようになるかもしれないけれども、よく見ると、もちろん、<10'> と <11'> の述語が <10> と <11> の述語と同じ単語なのに、意味がそれぞれ異なっていることが分かる。つまり、<10> と <11> は「名前をおっしゃる」または「名前を言う」という行為を意味する（従って両方ともは動詞である）が、<10'> と <11'> は「名前がある」とか「名前が付いている」という意味の述語であって、状態動詞である。結局、この問題は「おっしゃる」や「いう」といった単語のそれぞれ同じ形で異なる意味を持つことができる現象であり、動詞に「のだ」が必要という先の規則を反駁するよりも確証すると言っても良いであろう。

しかし、上に立てた「のだ」の必要絶対を求める規則は今まで動詞についてしか述べていないが、前頁の「い」形容詞の例文 <7> に戻ると、あそこでも「のだ」が付いたと見える。こんな「い」形容詞の述語に付く「のだ」を省くことができるかどうかとここで少し試してみよう。言い換えれば、動詞の述語について分かってきた「のだ」が必要という決まりは「い」形容詞の述語の場合でも有効であるかどうかということを確認してみよう。もう一度、夜帰ったら、奥さんがどこでも見付からないサラリーマンといった文脈を繰り返そう。その時に、

<7> ? 「ああ、そうだった。今日は遅かった」

とはあまり言えないので、「のだ」を付けるのは「い」形容詞の場合でも必要のように見えるが、同じ <7> の文を少しだけ変更して独り言の疑問

<7'> 「ああ、そうだったか。今日は遅かったか」

という形にすると、何も「のだ」を付けなくても急に言えるようになる。

従って、全部の文法的に起こり得る述語の中で果たしてどの述語にどの場合に「のだ」を付ける必要絶対があるかという問題をあまりに早めに一般化する前は、ここでは皆の有り得る述語を含む調査を行わないと不正確になると思われる。

3. 内容の述語として有り得る述語の「のだ」必要調査

3.1. 調査の範囲

2.1. 節の終りでは、想起の内容に含む述語として（命令・依頼・勧誘・意志などを表す述語を除いて）どの述語でも可能であると一般的に述べた上で、これから

動的動詞、 状態動詞、

テンスの意味が濃い「い」形容詞、 状態の意味が濃い「い」形容詞、

テンスの意味が濃い「な」形容詞、 状態の意味が濃い「な」形容詞

動的動詞の否定形、 状態動詞の否定形、

テンスの意味が濃い「い」形容詞の否定形、 状態の意味が濃い「い」形容詞の否定形

テンスの意味が濃い「な」形容詞の否定形、 状態の意味が濃い「な」形容詞の否定形

といったそれぞれの述語に「のだ」を付ける必要絶対があるかないかと調べてみよう。

（「名詞+状態動詞」、また「名詞+する」という二つの述語を状態動詞または動的動詞として扱うことにする）。

そして、想起の構造における「のだ」に二つの使い方があるように見える。例文

<7> 「ああ、そうだった。今日は遅いんだ」

をもう一度繰り返して見ると、ここでの述語と「のだ」の構造は

a 「述語『ル』形+の+『タ』形」 のようであるが、

<7b> 「ああ、そうだった。今日は遅かったんだ」

という文はとてども<7>と同じ意味を表し、<7>と同じほど可能であるのに、述語と「のだ」の構造は aと違って

b 「述語『タ』形+の+『ル』形」 のようであると気が付く。

この二つの aと bの構造は「のだ」の付く述語の場合どこも同じほど可能であれば、簡単に「aの構造や bの構造どちらでもいい」とは言えるが、始めの例文

<3> 今日ノ会ハ何時ニ始マルンダツタ?

を<7b>と同じように bの構想にしてみると、非文法的になるという結果がでる

<3b> ×「今日の会は何時に始まったんだ?」（未来にある予定）。

だから、これからの調査で、どんな述語は両方とも aも b、またどんな述語は aの構造や bの構造にしなければならないかという問題にも答えてみよう。

そして、最後に、「のだ」を付けないと非文法的になる述語は、「のだ」が付かないまま疑問文の構造にさせると文法的になるかという問題にも応じてみよう。

こういった問題であるので、先に述べた述語を皆それぞれ次の形にしてみて、文法的か非文法的になるかと試してみよう。

- | | | | |
|---|----------|---|---------------|
| a | 「ル」んだった。 | = | 「『ル』形+の+『タ』形」 |
| b | 「タ」んだ。 | = | 「『タ』形+の+『ル』形」 |
| c | 「タ」。 | = | 「『タ』形+終止」 |
| d | 「タ」か。 | = | 「『タ』形+疑問」 |

3.2. 想起の内容となる述語の「のだ」が付く必要一覧

1. 動的動詞

- <3> a 今日の会は何時に始まるんだった。 O
 b 始まったんだ。 X
 c 始まった。 X
 d 始まったか。 X

2. 状態動詞

- <6> a あ、そうだった。今日は休日なのだった。 O
 b 休日だったんだ。 O
 c 休日だった。 O
 d そうか。今日は休日だったか。 O

3. テンスの意味が濃い「い」形容詞

- <7> a ああ、そうだった。今日は遅いんだった。 O
 b 遅かったんだ。 O
 c 遅かった。 ?
 d あ、そうだったか。今日は遅かったか。 O

4. 状態の意味が濃い「い」形容詞

例えば、ある歌舞伎座の照明家が「勸進帳」の試演の時に舞台を照明しているところである。明るさをかなり暗くしているが、急に役者に照明をもっと明るくするように叱れてしまう。その瞬間に次のように思い出す

- <12> a ああ、しまった。このシーンは明るいんだった。 O
 b 明るかったんだ。 O
 c 明るかった。 ?
 d 明るかったか。 O

(9)

5. テンスの意味が濃い「な」形容詞

6. 状態の意味が濃い「な」形容詞

例えば、着物屋さんで長い間にわたってできるだけ安い着物を選んでいる時に、今見ているところの着物はどうして驚くほど高いかと思いつく瞬間に

- <13> a ああ、そうだったね。この生地は上等なのだった。 0
b 上等だったんだ。 0
c 上等だった。 ?
d あ、そうだったっけ。この生地は上等だったっけ。 0

7. 動的動詞の否定形

ある旦那さんは夜遅く帰って、どうして奥さんがどこにも見つからないかということの理由を思いつく瞬間に

- <14> a ああ、そうだった。宏子は今晚帰ってこないだった。 0
b 帰ってこなかったんだ。 ×
c 帰ってこなかった。 ×
d あ、そうだったか。宏子は今晚帰ってこなかったか。 ×

8. 状態動詞の否定形

- <15> a ああ、そうだったね。君にはお父さんがいないんだね。 0
b いなかったんだね。 0
c いなかったね。 0
d あ、そうだったかね。君にはお父さんがいなかったか。 0

9. テンスの意味の濃い「い」形容詞の否定形

普通いつも朝早く事務所へアルバイトにくる人がどうしてまだ来ていないかと思いつく瞬間に

- <16> a ああ、そうだった。今日は早くないだった。 0
b 早くなかったんだ。 0
c 早くなかった。 ?
d あ、そうか。今日は早くなかったか。 0

10. 状態の意味が濃い「い」形容詞の否定形

同じ歌舞伎座の照明家が「勸進帳」の試演の次のシーンを照明しているところである。前のシーンは暗すぎたので、今明るさをかなり明るくしているが、急に役者にまた叱られてしまう。

- <17> a しまった。今のシーンは明るくないんだ。 0
 b 明るくなかったんだ。 0
 c 明るくなかった。 ?
 d あ、そうか。今のシーンは明るくなかったっけ。 0

11. テンスの意味が濃い「な」形容詞の否定形

12. 状態の意味が濃い「な」形容詞の否定形

例えば、割に贅沢なものしか売っていない着物屋さんで、今手に持っている背広はなぜ比較的安いかと思いつく瞬間に

- <18> a あ、そうだったね。この生地は上等じゃないんだ。 0
 b 上等じゃなかったんだ。 0
 c 上等じゃなかった。 0
 d あ、そうだったっけ。この生地は上等じゃなかったっけ。 0

(11)

以上のデータを一つの比べやすい図にまとめると、だいたい次のようになるであろう。

	確言					否定形				
	動詞		形容詞			動詞		形容詞		
	1. 動動 詞的	2. 動状 詞態	3. いテ 形ン 容ス	4. 形状 容態 詞い	6. 形状 容態 詞な	7. 詞動 否的 定動	8. 詞状 否態 定動	9. いテ 形ン 否ス	10. 形状 否態 定い	12. 形状 否態 定な
a「ル」んだった	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
b「タ」んだ。	×	0	0	0	0	×	0	0	0	0
c「タ」。	×	0	?	?	?	×	0	?	?	0
d「タ」か。	×	0	0	0	0	×	0	0	0	0

3.3. 結果の解釈

上の調査のまとまった結果を表す図をこれから少し解釈してみよう。

まず目立つと思われるのは、想起の内容の述語を a (つまり「内容の述語の『ル』形+の+『タ』形) のような形にすると、どの述語だっても文法的に正しいであるということであろう。しかし、こうであるのに、想起の構造をただしく使えるようになりたい日本語学習者に対して「述語に『のだ』を付けるか付けないかはっきり知らないとき、いざというために付けて必ず正しくなる」と教えてはいけないであろう。やはり、どの言語にもぴったり同じ意味を表す同義意味語は実にはない上で、二つの文法的構造もぴったり同じ意味を表す筈はないと思われる。だから、a~ cの形の間にも微妙な違いがあるのもそれほど不思議ではなく、何のぼかしが付けたいかによって a~ c、また dの間から適当に選択しなければならないであろう。

そして、他に目立つ結果は動的動詞が確言1.も否定形7.も b~ dの形の場合に非文法的になっているということであろう。言い換えれば、動的動詞はいつでも「のだ」が付く必要絶対であり、また付け方は aのようにしか出来ないということである。これは正直にいうと寺村(1984: 340)にもう出てきている情報であって、前からもう分かっていたが、ここでどうして動的動詞が b~ dの形にはならないかと想像してみると、一つの解釈は、動的述語が一般的にアスペクトの意味が他の述語と比べて一番強いので、「タ」形にすると、聞き手がそれらの「タ」形をアスペクトの意味として間違えて解釈して、混乱してしまう恐れが多く、それで避けるという考えであろう。やはり、

〈3b〉 今日の会は何時に始まったんだ?

のような文は想起の意味を表すことが出来るけれども、こんな形では既然の意味になってしまう。つまり、文脈を加えれば、〈3b〉の発話時点は会が行った後の時であるので、この「タ」形はテンスを表すであろう。要するに、〈3〉 b~ dと〈14〉 b~ dは時間的な矛盾になっているということである。

他の解釈は、想起の内容は文法的に状態性や名詞性を表す必要があるという考えであろう。状態動詞の確言2.と否定形8.、また「な」形容詞の否定形12.を、問題になっている動的動詞の確言1. b~ dと否定形7. b~ dに対立すると、状態動詞が一般的に、また「な」形容詞が否定形の場合に、どの形でも可能であるということが目立つであろう。つまり、状態動詞と「な」形容詞の否定形はそのまま(=「のだ」が付かないで)想起の内容の述語になることが出来るために、ある特別な、動的動詞が持っていない性質があるようである。状態動詞と「な」形容詞の否定形の動的動詞と違う一般的な共通点は“状態性”とか“名詞性”などのような性質であると考えられるので、動的動詞は想起の内容の述語になるために、まず状態動詞と「な」形容詞の否定形と同じような性質を得ざるを得なく、それは「のだ」と結合する手段で生じるという考えである。

この二番目の解釈(これから状態化の解釈と呼ぶことにする)に、実は簡単に批判ができると思われる。もし状態動詞は想起の内容の述語となるため、「のだ」と結び付く必要だけがあると論じると、どうして1. bと7. bが「のだ」が付いてあるのに非文法的になっているのであろうかという論拠が述べられる。

しかし、想起の構造を立てるのに、状態性や名詞性をまだ持っていない内容を状態化する必要だけでなく、同時に想起のムードを表す「タ」形もどこかで入れなければならないということであろう。つまり、

〈3'〉 今日の会は何時に始まるんだ?

という文は「のだ」は付くけれども、「想起」は表さないであろう。こういう風にどこかで「タ」形を入れる必要があると分かる。先にもう見たように、これには二つの形 aと bがある。しかし、動的動詞を bのような形にすると、一番目の解釈でもう分かった通り、テンス的に聞き取る恐れが多すぎてしまうであろう。

結局、動的動詞の場合に a形のような「のだ」がどうして欠けてはならないかと説明し

てみると、状態化の必要かテンス的意味を避けるかといった二つの解釈のどちらか正しいかという問題ではなく、両方とも一緒にこの現象のほんの少しだけの説明になることができると考えられる。

次に、形容詞の述語の c形と d形との対立（具体的にいうと、3. c, 4. c, 6. c また 9. c, 10. cのそれぞれの dとの対立）を少し考えてみよう。形容詞述語の場合は、ただ cの終止のような形で文を終えると、あまりに言えなくなるという点があるけれども、不思議に、この c形に「か」と疑問を表す助詞を加えると、つまり終止形を疑問化させると、言えるようになる現象がある。想起の構造には文法的に正しくなるために状態性や名詞性の内容が必要であるところで思い出すと、疑問のモード dは形容詞述語の意味をある程度状態化や名詞化させるようである。

やはり、「どこ」や「どうして」などの、情報を求める単語のない疑問は、一般的に言ってみると、ある内容が正しいかどうかとあたかも内容を“外”から聞くと考えられる。これを図で表そうとすると、次の

<19> 「帰りますか」

という疑問文がだいたいこういう風に解釈できるであろう。

<19'> [あなたが帰るといふ私の推測は] 当たる？

つまり、<19>の疑問文はもともと疑問の内容と疑問のモードから結合した構造として想像できるであろう。こういう風に疑問のモードが質問されるコトを内容化すると考えると、形容詞述語の3., 4., 6., また 9., 10. のそれぞれの d形はどうして可能であるかと理解できるかもしれない。想起の内容は、内容であるので、名詞性・状態性や“内容性”を持っていなければならないとここでも考えることが出来るであろう。

しかし、こういう風な考えは、動詞の1. と7. の d形が疑問になっても非文法的であるということと矛盾になるのではないかとも思われる。だから、1. d と7. d はなぜ疑問化で内容性を持っていても、また想起の構造で更に必要な「タ」形も持っていても非文法的になっているのかとまだ説明がないようであるけれども、この問題はまた<3d> と<14d> の文がテンスを表すという説明で解釈できるであろう。

3.4. まとめ

ここでこの 3 節の結果を簡単にまとめてみよう。

想起の構造を立てるのに、まだ状態性・名詞性 (= “内容性”) を持っていない述語は思い出す内容の述語になることが出来るために状態化・名詞化 (= “内容化”) しなければならないようである。これが必要な場合には「のだ」を付けるか疑問化させるといった二つの手段でできる。想起の構造に更に必要になっているのは想起のムードを表す「タ」形の使うことである。これは「のだ」が付く必要の場合に、内容の述語になっている意味的述語でも、また「の」の後に位置する「である」という状態動詞でも出来る。「のだ」が付く必要のない場合に、思い出す内容の述語だけで出来る。「タ」形にさせた述語がテンスを表すなら、構造は文法的に正しくても「想起」を表さなくなってしまうであろう。

3.5. 「のだ」が付く場合に文の述語は果たしてどこにあるか

そして、ここで前の 2.3 節の始めに起きた「のだ」が必要な場合、想起の述語は果たして「の」の前の動詞か「の」の後の「である」という (状態) 動詞かという問題に戻ると、一応、意味的述語、つまり伝えたい意味を表す述語は「の」の前に位置する述語であるが、この想起の構造の文法的述語は「の」の後につく「である」という状態動詞であると答えたい方がいいかもしれない。もし「の」の前に位置する述語は意味的述語でなければ、この 3 節で論じてきた動的動詞の「タ」形を巡る問題も起こらない筈であろう。

4. 調査の結果と参考文献

ここからは、今まで分かって来たことをあと少し参考文献と比べてみよう。

やはり、これまでのデータにあった絶対必要な「のだ」は動的述語の確言と否定形、また全部の形容詞の確言、そして「い」形容詞の否定形に限る。必要でないのはぜんぶ状態動詞述語の確言も否定形も、そして「な」形容詞の否定形である。

寺村は (1984: 339) 内容の述語の性質について「内容文の述語が名詞プラス「ダ」(の類)、形容詞、状態を表す動詞、[中略] でなければならない。」と述べ、またこれ

らの述語を 332頁(1984)では次のようにまとめる。

状態の動詞		アル、居ル、デキル
動詞の否定形		食ベナイ、居ナイ
形容詞	A イ形容詞	アツイ、ウレシイ、ナイ
	B ナ形容詞	元気、短気、ノン気
名詞	A 形容詞性のもの	病気、曇り、ウソ
	B 指定・指定に使われるもの	机、動物、太郎

寺村(1984: 339)によって、上にまとまった述語は皆「のだ」で名詞化せず想起の内容の述語となるのであり、「のだ」を付けなければならない述語として動的動詞をしか取り上げないが、3節で見てきたように、両方とも「い」形容詞も「な」形容詞の確言も、そして「い」形容詞の否定形でも状態化・名詞化しないとならないという結果がでてきた。

5. 想起の「のだ」は「説明の『のだ』」か「名詞化の『のだ』」か

今まで「のだ」の必要絶対として論じてきたのは、「の」が欠けると文法に絶対違反となるという文法的必要絶対であったが、前に分かってきた通り、「のだ」は状態動詞の確言と否定形、また「な」形容詞の否定形の場合に欠けてもいいようである。状態動詞と「な」形容詞の否定形は内容の述語になるためにもう十分に状態性・名詞性を持っているので、<6> aと b、<15> aと bまた<18> aと bのそれぞれの文の「のだ」の場合には果たして“普通”の「説明の『のだ』」か「名詞化の『のだ』」であろうかとは調査のやり方の上であまり判断できないであろうけれども、少なくとも「のだ」の必要絶対の場合に、それらの「のだ」は「名詞化の『のだ』」であるとは言えるであろう。

6. 発話者の心理

そして結局ここではなぜ想起の時にこんな珍しい、何も“普通”の「過去」を表さない「タ」形が起こるのかという問題に戻り、想起の構造を使う時の発話者の心理をspeculationをしながらどこかで「過去」か「時点の差」が出るように描こう。これからの想像はどうしても科学的な論理もなく、ただ着想にすぎない。

思い出す行為では、過去に認識していたが想起の時点まで忘れていたある内容(=事柄、コト)をまた認識するかされるということを行うであろう。つまり発話者は自分の心理の中で、忘れた内容と時間的な前後関係にいと考えられる。はっきりと言うと、前になっているのは知っていた内容であろうが、後とか(もっと詳しくいえば)今になっているの

はその内容を忘れてしまったという気持ちであろう。この時間的な、発話者の記憶の中の前後はけっきょく想起の「夕」形、いわゆる「心理的『夕』形」が上げられる原因であろう。

終りに、ここでこの想起の過去は日本語に限る現象でもないといわねばならないかもしれない。先に想像してみたように、かなり人間的なことのようであり、その上で色々な他の言語にも起こるのである。少なくともドイツ語の

<20> Es tut mir leid, aber wie war doch gleich Ihr Name? と英語の

<21> I'm sorry, but what did you say your name was?

といった文はとても

<22> 失礼ですが、お名前は何でしたか?

という日本語の文と同じような時に使う。

--- * ---

参考文献

加藤・福地（共著）．1989．『テンス・アスペクト・ムード 外国人のための日本語
例文・問題シリーズ』荒竹出版．

北村保雄（編）．1989．『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体（上）』明治書院．

寺村秀夫．1984．『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版．

寺村秀夫他編．1987．『ケーススタディ日本文法』桜楓社．

益岡・田窪（共著）．1989．『基礎日本語文法』

町田健．1989．『日本語の時世とアスペクト』アルク．